谷崎潤一郎「小さな王国」論
―「新教育」をめぐって―

出木良輔

はじめに

谷崎潤一郎「小さな王国」は、小学五年生を受け持つ教師貝島の学級に転入してきた沼倉という一人の子どもが、貝島が教室内において有していた権威を巧妙に奪取していく様を描いた物語である。この作品は大正七年七月に執筆され、翌月の『中外』に発表された。[1]

周知のように「純粋無垢」な存在、あるいは保護すべき弱い存在としての子ども像は明治中頃から徐々に認識され始め、大正七年に創刊された童話・童謡雑誌『赤い鳥』によって定着した。そこに打ち出されたような子どもの心性とは程遠い、「邪悪[2]」な子どもたちを描くことで時代への一つのアンチテーゼを提出したとも言えるであろうこの作品だが、発表当時はどのように迎えられたのだろうか。

大正デモクラシーの中心的牽引者であった吉野作造は以下のように述べている。[3]

谷崎潤一郎氏の「小さな王国」は我国現代の社会問題に関し頗る暗示に富む作物である。小学生の単純な頭脳から割り出された共産主義的小生活組織の巧みに運用せらるる事や、前途有望を以て自らも許し人も許して居った青年教育家の生活の圧迫に苦しめる結果、不知不識其共産的団体の中に入って行く経過は、一点の無理が無くすらすらと説き示されて居る。作者の狙い所は何れにあるにせよ、我々は之によって現代人が何となく共産主義的空想に耽って一種の快感を覚ゆるの事実を看過する事は出来ない。而して少しく深く世相を透観する者にとって、今や社会主義とか共産主義とかいう事は、理論ではない、一個の厳然たる事実である。

このように、作品中で描かれる子どもたちの共同体「沼倉共和国」に共産主義的性格を認め、そこから谷崎による社会批判を見出す読

みはこれ以降様々な形でなされていく。代表的なものとして伊藤整が中央公論社版『谷崎潤一郎全集』に以下のような解説を残している。[4]

この作品は少年の世界に形を借りたところの、統制経済の方法が人間を支配する物語りである。現代社会は必然的に統制経済の社会へと推移しつつある。その統制経済社会で、ある権力のもとに発行される紙幣が、即ち経済上の拘束が、人間の生活意識を変え、人間の価値判断を狂わせるという物語である。谷崎潤一郎の全作品の中で最も特色のある現代社会の批判性を備えた作品と見ることが出来る。

先行研究においても、土屋哲は「芸術と生活とが、いまだどこかでかすかに、もつれあって」いた頃の谷崎の「社会問題」への「一生一度の傾斜」としてこの作品を捉える立場を示しており、[5]森岡卓司は「他者の閉鎖系に絡め取られていく貝島という危機的〈主体〉のあり方」に「現代社会の批判」を認めている。[6]一方で中谷元宜はこの作品を「明確な社会批判というよりも、共産思想についての微妙な感度」を表現したものだとしているが、[7]これらはすべて谷崎の問題意識の矛先を「社会」というタームで捉えている点で共通している。ここにおいて問題とされているのは、例えば「資本主義」ないし「共産主義」などといった言葉を冠して語られるもの、すなわち経済システムとしての「社会」にすぎない。作品発表前年にロシア革命が生じていることもあり、このような読みは作品の同時代状況を踏まえたものとしてこれまでなされ続けてきた。

しかし、この作品に秘められた谷崎の問題意識を探る上では、中心的舞台として描かれている学校、そしてそこで行われる教育とその担い手である教師の姿に目を向けることこそ重要ではないだろうか。よく知られるように谷崎には「少年もの」と称される一連の作品群があり、[8]「小さな王国」もその中に位置づけられる。しかし学校という舞台、そして何より教師を主人公としてその生活を描いていることはこの作品のみに当てはまる特徴だと言えるだろう。ではそこにはどのような意味が秘められているのか。学校教育をめぐる当時の言説と作品とを照合しながらこのことを考えてみたい。

一、旧時代の教師像としての貝島

日本では明治二〇年代後半以降、学校・家庭双方における教育論が盛んに生産されるようになる。そのきっかけとなったのは明治二六年七月の文部省訓令第八号が「家庭教育」に言及し女子教育の振興を訓じたことであり、この頃ルソーの『児童教育論』（文遊堂、明治三〇年一〇月）などといった西欧の教育論も紹介され始める。それに前後して国内の教育学者・心理学者による論も多く出現し、またその後大正期に入ると、専門家のみならず一般家庭の母親が自らの体験に基づいた家庭教育論・育児体験談を出版するようにもな

る。[9]

また大正期には、一九一〇～二〇年代にかけてのデモクラシーを背景に、それまでの画一的で型にはめたような教育スタイルを廃し「児童本位（中心）主義」を謳う「新教育」が行なわれ始めたことや、それまでの教師中心・知識注入主義の教育、すなわち「旧教育」に批判的な教育論が数多く提出されたことなどもよく知られている。

こうした当時の新しい教育思想と、「小さな王国」における貝島の教育思想との共通性についてはすでに指摘がなされている。田中俊男は、「児童中心主義」の最初の提唱者だった西山哲治が明治四五年に開設した私立帝国小学校の「校憲」第九条「児童をして自治的に協力勤労せしむべし」という箇所と、貝島が沼倉の「独特の個性」に目をつけて彼に学級統制の中心的役割を与えたこととの間に符合を見出し、「貝島は決して頑迷固陋な旧時代の教師ではなく、新時代の潮流を感じ取る能力も備えた、「児童中心主義」の隠れた実践者の一人」だったとして彼の教育姿勢に一定の評価を与えている。[10]

しかし、貝島の教育姿勢と「新時代の潮流」との符合は必ずしも初めから一貫して見出せるものではないことにも注意する必要がある。例えば以下の一節を見てみよう。

「今日は二宮尊徳先生のお話をしますから、みんな静粛にして聞かなければいけません。」

かう貝島が云ひ渡して、厳かな調子で語り始めた時、生徒たちは水を打つたやうに静かにして、ぢつと耳を欹てゝ居た。隣りの席へ無駄話をしかけては、よく貝島に叱られるおしやべりの西村までが、今日は怜巧さうな目をパチクリやらせて、一心に先生の顔を仰ぎ観て居た。暫くの間は、諄々と説き出す貝島の話声ばかりが、窓の向うの桑畑の方にまでも朗かに聞えて、五十人の少年が行儀よく並んで居る室内には、カタリとの物音も響かなかつた。

これは修身の時間の一風景である。修身とは戦後以降言うところの「道徳」の時間にあたり、説話・伝記などの読み物を通した徳育教育が行なわれた。明治四〇年の小学校令改正による国定教科書の修正に伴って明治四三年から使用され始めた第二期国定教科書は国家主義に大きく傾斜していたことで知られているが、この際に国民教育の要として据えられていたのが修身という科目でもあった。

餓鬼大将でもある「おしゃべりの西村」でさえ「カタリとの物音も響か」せないというこの授業風景を、関礼子は「率直に「つまらない」という自由さえも奪われている」「異常な光景」と捉えているが、[11]このように生徒に対して抑圧的とも言える教育は「旧教育」、とりわけ明治期に支配的であったヘルバルト教育学の下ではむしろ肯定的に捉えられていた節が少なからずある。

明治政府が政策モデルをドイツに定めたことによって一八八〇年

代後半から導入され始めたヘルバルト教育学は、教育の中心を道徳心の形成に置き、心理学を基礎とした教化・規律・訓練を重視するという内容のものだった。これは以後、明治三六年の教科書国定化開始とも呼応しながら小学校における管理教育を正当化するものとして教育界を支配していくこととなり、当時の教育に画一性をもたらしたことで知られている。

このヘルバルト式の管理教育を推し進めた教育者に、例えば尺秀三郎がいる。ドイツ留学でヘルバルトを学んだ尺は「管理は恰も自治の出来ぬ幼稚の人民を発達せしめんとて政府が之に干渉保護を為すこと一般なり」「管理の目的とする処は或る権威に従順せしめて悪しき希望を抑制せしむるなり」として管理教育を紹介・推奨し、「教授と陶冶とを為すには必ず管理を伴ふことを要する」とする立場を示した。[12] 尺によれば、「管理」においては児童を「オドシツクル」こと、すなわち「威嚇」によって彼らへの「威厳」を保つことが第一に必要なのだという。管理教育とはこのように児童の恐怖心を利用した、教師による独裁体制に他ならなかったのである。

谷崎は自身の子ども時代を回想した随筆「幼少時代」[13]で、自身の小学校時代の担任だった野川閏栄が貝島のモデルにあたるということを述べている。[14]「お茶の水の師範学校」（東京高等師範学校）を出たばかりだったという野川が谷崎の担任になったのは明治二六年のことであるが、明治二三年にはドイツ留学帰りの野尻精一が東京高等師範学校でヘルバルト教育学の本格的な講義を行なっていることから、野川は先述したような圧迫的・知識注入主義的なヘルバルト式の管理教育の信奉者だったのではないかということが推測される。もしそうだとすれば関の言う「異常な光景」は、小学校時代の谷崎にとってはむしろ極めて日常的な光景だったことだろう。

さらに、この「異常な光景」の直後に私語をした沼倉に対し貝島が発する「さう云ふ性質を改めないと、お前は大きくなつてからロクな人間にはならないぞ」という言葉からも彼の教育思想、特に児童観を窺うことが出来る。つまり貝島が問題としているのは授業中の私語という行為の是非よりむしろ、沼倉が「大きくなつてからロクな人間に」なれるかどうかなのであり、彼にとって子どもとはあくまで大人になる過程の存在に過ぎないのである。ここには子どもを小国民、すなわち帝国の後継者として見なす、前田愛の言う「何かになる」存在としての子どもへのまなざし[15]があると言って良い。堀尾輝久は、貝島の発言や態度にも見えるような「子どもの独自性も、社会とその価値に反さない限りにおいてのもの」とする発想を「似而非児童中心主義」と称し、明治末期から大正期にかけての教育者たちがこれを克服できなかった点に大正期の「新教育」の矛盾と限界を見出しているが、[16]先に述べたことを踏まえるならばこの「似而非児童中心主義」的な児童観は貝島にもほぼそのままあてはめることが可能である。少なくとも修身の授業風景における貝島からは、

尺らが奨励したような圧迫的・知識注入主義的な管理教育を行なう旧時代の教師の姿を見て取ることが出来るだろう。

二、新時代の教師像としての貝島
―「恐い先生」から「面白いお友達」へ

しかし、このような圧迫的・知識注入主義的な管理教育のあり方に対しては徐々に批判の目が向けられていくことになる。樋口勘次郎の以下のような主張はその先駆として有名である。[17]

ヘルバルト派教育学にては、教授の予備として、管理の大に必要なることを説けども、予は反対の意見を有するなり。ヘルバルト派の唱ふるが如き管理は、小学校に於ては、更に必要なきのみならず、却て誤解を来して、害毒を流すものたることを恐るなり。教授を施さむとするには、まづ教場に於て一定の秩序を立て、注意を一点に向はしめざるべからず。児童の我儘、例へば教室にありて、種々なる手いたづらをなし、或は故意に靴音を高くして、以て自から快しとし、甚だしきは、喧嘩をなすが如き、之を抑ふるに、命令を以てし、之れを威すに威厳を以てし、盲目的に服従せしむるにあらずば、いかにしてか教授をなすことを得むといふ。之れ同派の主張する所の学説なり。

中野光によれば、樋口のこの主張は「子どもの自発性や個性を抑圧し、画一的な知識の注入主義に支配されつづけてきたそれまでの絶対主義的教育に対して、かなりあざやかに「近代的なもの」を対置しただけに、とりわけ当時の青年教師の胸に共鳴と支持を得た」のだという。[18] 実際これ以降、樋口の論に共鳴するように様々な形で管理教育批判が行なわれていく。例えば赤津隆助は管理教育を以下のように捉え、このような教育は「殺人的教授」に他ならないとした。[19]

少し私語でもしやうものなら、忽ち迅雷の様な一喝を喰はせ、戦慄させ、委縮させ、退嬰させて居るのは、即人を殺しつゝあるのではあるまいか。（中略）

発問は、するが、質問はさせぬ。命令はするが、発言はさせぬ。教師のみが活動して、児童には少しも活動させず、ただただ、静におとなしくさせて置くのが、教授法に巧なのだ、といふならば、其教授法は、人を殺しつゝあるのではあるまいか。

こうした教育のパラダイムの推移と同じように、貝島の教育のあり方も変化を余儀なくされる。その変化の様子を描いているのが本文中の以下の一節である。

われわれの生徒に対する威信と慈愛とが、沼倉に及ばない所以のものは、つまりわれわれが子供のやうな無邪気な心になれないからなのだ。全く子供と同化して一緒になつて遊んでやらうと云ふ誠意がないからなのだ。だから我れ我れは、今後大いに沼倉を学ばなければならない。生徒から「恐い先生」として

畏敬されるよりも、「面白いお友達」として気に入られるように努めなければならない。

教師である貝島が子どもと「お友達」になることを選ぶ場面である。今日ではこのような教師像は「お友達先生」などと揶揄され批判の対象となることも少なくないが、「新教育」の体制下においてはどのように捉えられていたのだろうか。

これに関する言及も当時の言説の中に見ることが出来る。大正期から昭和期にかけて活躍した教育学者である稲毛詛風は、当時の教育が「教師本位主義」から「児童本位主義」へと移行したことを断言し、後者においては「児童其のものの本性に内在する進歩的原理法則に従って益々其の発達を助長」する「進歩主義」、「自ら児童の個性を理解すると共に、これを尊重」する「個性尊重主義」の立場に立つことが教師には求められるのだと述べた[20]。特に注目すべきは以下の一節である。

教育の主体は被教育者であって教育者ではなく、従って教育者は被教育者に対して在来の如き権威者のような態度心持を持つべきものでなく、寧ろこれを尊敬し、自己を以てその侍者または朋友を以て任じ、出来るだけ其の自由に任せ、学科の選択は勿論、教師の選択をも彼等の自由に一任し、嫌な授業は受けることはないし、嫌な教師は排斥してよいし、勿論嫌な学校などに入っている必要はない。

「朋友」という言葉が示す通り、大正期に民本主義思想の影響下で広まった「児童本位主義」は、教師と子どもとの間に「お友達」としての関係性をも要求していたのである。そしてそのような時代の要請を無意識ながらも受け入れた貝島は、「新時代の潮流を感じ取る能力も備え」[21]た存在だったと言えるのかもしれない。しかし先に述べたように、一方ではそのような「児童本位主義」とは対照的に、子どもに対して圧迫的な教育を行なう旧時代の教師の姿も貝島からは見て取ることが出来る。そのような「恐い先生」としての教師像の反転、すなわち「面白いお友達」への変化が、明治期から大正期にかけての学校教育のパラダイムシフトを捉えたものであったことをここでは確認しておきたい。

明治から大正期にかけての教師の経済的困窮に着目し「聖職としての教師が職業としての教師に転換する物語」としてこの作品を捉えた日高佳紀はこのように「お友達」化していく貝島の姿を、特に第一次大戦後にかけて教師という職業の社会的地位が低下した状況の反映として寓意的に捉えているが[22]、教師と子どもが「お友達」になるという発想が当時むしろ積極的に推し進められていたことを踏まえるならば、貝島の変化は当時の学校教育に実際に見られたような思想の変化を映したものとして捉えるのが妥当であろう。先に述べたように谷崎がヘルバルト式の管理教育に染め上げられた少年時代を送ったのだとするならば、彼にとって教師とは「恐い先生」

以外の何者でもない存在だったはずである。それが大正期に民本主義などの影響を受けることにより、ともすれば「面白いお友達」へと変貌しつつあった。そのような当時の状況が、貝島の教育思想の変化によって表されているのである。

三、新時代の教師像としての貝島
―「教育者」から「学校教師」へ

さらにもう一つ、大正期の教師と貝島の姿を照合してゆく上で注目すべき証言がある。鹿児島師範、広島師範で一三年間の教師生活を送った三浦修吾は以下のように述べている[23]。

私は学校の教育といふものと、真実の教育とを、区別して考へやうとするやうになつた。人間を其の性格の根本から教育する。つまり全人の教育、これが真実の教育である。これは人を教育し得る人物をまつて、はじめて為され得る教育である。さういふ教育を為し得る人は、人を教育しないでは居り得ないといふ願が、其の衷心に動いてゐる。（中略）今日の学校の教師が、悉くさういふ教育者であるといふ事は出来ない。学校教師の中に、さういふ人もあるであらう。然して学校教師で無い人の中にも、左様いふ教育者があるのである。

また、これに関しては中森孜郎が以下のように解説している[24]。

三浦の教育論ないし教師論の特徴は、「真実の教育」と「学校教育」、「教育者」と「学校教師」の使い分けにある。すなわち、「人間を其の性格の根本から教育する」という「全人の教育」が真実の教育であり、それは「人を教育しないでは居り得ないと云う願が、其の衷心に動いている」教育者でなければ為し得ないことである。それにひきかえ、「生計の資を得んが為に、学校に職を奉じている」学校教師は、「あてがわれた自分の仕事」つまり学科の教授に精を出せば、それでよいではないか、と彼は説く。

教壇に立つことの目的は「教育」そのものか、あるいは「生計の資」か。三浦がこのような問題について論じた理由として、特に第一次世界大戦後、生活難に苦しむ庶民が増加し、教師もその例外ではなかったことが挙げられるだろう。大戦の影響により生じた空前の好景気（大正景気、大正バブル）は所謂「成り金」を創出したが、その一方で物価の急激な上昇と収入が釣り合わない一般庶民たちの生活は困窮を極めていたのである。

当時の教師たちの経済状況が貝島に投影されているということはこれまでに度々指摘されているが[25]、三浦の論を踏まえた上で貝島の姿を捉え直してみよう。教師としての貝島の性格は最初に以下のように記される。

性来子供が好きで、二十年近くも彼等の面倒を見て来た貝島は、いろいろの性癖を持つた少年の一人々々に興味を覚えて、誰彼

の区別なく、平等に親切に世話を焼いた。場合に依れば随分厳しい体罰を与へたり、大声で叱り飛ばしたりする事もあつたが、長い間の経験で児童の心理を呑み込んで居る為めに、生徒たちにも、教員仲間や父兄の方面にも、彼の評判は悪くはなかつた。正直で篤実で、老練な先生だと云ふ事になつて居た。

ここに描かれた段階では「生計の資」を得ることは貝島にとってそれほど切実な課題ではなく、教師としての彼の原動力は子どもへの関心や愛情にある。この時の貝島を三浦の言う「教育者」と呼ぶことに差支えはないはずである。

しかし妻と母の病の悪化を発端に、貝島の生活は次第に困窮してゆく。ここにおいても「いろ〳〵の物価が高くなつたので、病人の薬代を除いても、月々の支払ひは東京時代とちつとも変らなくなつて居る」という当時の物価騰貴が根本的原因として示されているのだが、注目すべきはそのような生活難に伴って学校での貝島の態度も豹変してゆくことである。次の一節にその様子が描かれている。

其れや此れやの苦労が溜つて居る為めか、貝島はよく教室で腹を立てゝは、生徒を叱り飛ばすやうになつた。ちよいとした事が気に触つて、変に神経がイラ〳〵して、体中の血がカツト頭へ逆上して来る。そんな時には、教授中でも何でも構はず表へ駈け出してしまひたくなる。

先に引用した修身の時間で私語をした子どもに対しても「まさか尋常五年生の子供を相手にムキにならうとはしな」い「老練」な貝島と、この場面の「ちよいとした事が気に触つて」「教授中でも何でも構はず表へ駈け出してしまひたくなる」貝島の姿とは明らかに乖離したものとして描かれている。「病人の薬代」や「月々の支払ひ」に追われ、教壇に立つことの目的を月給という形での「生計の資」を得ること以外に考えられなくなったこの時の貝島は「生計の資を得んが為に、学校に職を奉じている」存在、すなわち「学校教師」化した存在に他ならなかったのである。二つの引用部の間に見られる貝島の教育姿勢の変化とはつまり、三浦の言う「教育者」から「学校教師」への転向に呼応する形で生じたものだったと言えるだろう。

ただ、三浦が論じたような教師の俸給と生活の問題は第一次大戦後急に浮上したものではなく、それ以前の日清戦争期における物価高騰や増税を背景にも論じられていたことにも注意しておきたい。例えば沢柳政太郎は『教育者の精神』（富山房、明治二八年三月）において、教育者にとって「清貧は嘉すべき美徳」であり、「質素節倹」を尊ぶことこそ「教育者の精神」の一つであると述べている[26]。これと同様の論が展開されているのが久津見蕨村『教育時代観』（右文館、明治三二年一〇月）であり、ここには「動もすれば月俸の多きに誘はれて、その職を軽んじ、漫りに他に転ずる」教師たちへの批判を見ることが出来る。

このように日清戦期に提出された論は教師に美徳としての「清

貧」や「聖職」意識を要求し、逆に俸給を目的として教職に就くことに対しては批判的なものがほとんどであったが、その一方で三浦の論は当時の社会状況や教育現場の実情を見据え、教師が「生計の資」を目当てに働くことをも許容している。当時の新しい教育思想下では子どもの自由や自主性を第一に尊重する「児童本意主義」が支配的になっていたということは先に述べたが、それと並行する形で教師の側の（生活の向上を求める）自由もまた要求されていたのである。[27]つまり「恐い先生」から「面白いお友達」への変化と同じく、貝島の「教育者」から「学校教師」への変化もまた、当時の教育思想、とりわけ教師観の転回を反映したものだったと言うことが出来るだろう。

四、「沼倉共和国」の批判性

貝島と「生計の資」、すなわち金銭との関係について、もう少し別の角度から考えてみたい。この作品の冒頭部分では、高等小学校を卒業してから教師として「G県のM市の小学校」に転任するまでの貝島の経歴が記されているが、ここにおいて示されるのが「一八円」から「二十円」、そして「四十五円」と推移する彼の月俸である。これが単に貝島の経済状況を示すものではなく、彼の教師としてのキャリア（あるいはその向上）を象徴するものであることは言うまでもないだろう。ここにおいて記された貝島の月俸の額は、彼の教師としての「老練」さを裏付けるものとしても機能しているのである。

同じことが、子どもたちの遊びの世界である「沼倉共和国」にも見られる。この共同体に存在する以下のような制度に注目してみよう。

凡べての生徒は、役の高下に準じて大統領から俸給の配布を受けた。沼倉の月俸が五百万円、副統領が二百万円、大臣が百万円、――従卒が一万円であつた。

「大蔵大臣」が印刷した紙幣は沼倉の判を捺された後、「沼倉共和国」内の役職に応じて細かく設定された「俸給」として子どもたちに配布され、流通する。「沼倉共和国」においても、金銭が市場取引の際に実用性を発揮するものとしてのみではなく、当人の共和国内における階級を確認するものとしても機能していると言える。つまり、俸給の額によって集団内のヒエラルキーが可視化されるという状況が、大人社会と「沼倉共和国」の双方に存在しているのである。

このように、子どもの遊びの世界でありながらも大人社会と共通した構造を持つ「沼倉共和国」とはどのような意味を持つものなのだろうか。

「沼倉共和国」の大きな特徴は、これが子どもたちによって独自に作り出され、管理された遊びであるという点である。「沼倉共和国」の運営基盤となっている交換経済それ自体が大人社会の模倣である

ことは確かに否定できないが、それ以上にこの共同体の階級秩序を支える様々な規律、例えば先述の俸給制度などは紛れもなく子どもたちの創造力によって作り出されたものであり、沼倉たちはこれによって相互監視に基づいた自治体制を築き上げているのである。

このように子どもに独自の遊びを作らせることを狙いとした教育の主張や実践は、明治末期にはすでに僅かながらも行なわれていたという[28]。金港堂編集所編『全国付属小学校の新研究』（金港堂、明治四三年五月）によれば、静岡師範学校付属小学校では「秩序、規律、共同、自治等の精神」を養うための「団体的遊戯」を子ども自身に組織・発展させる実践が行なわれていた。また同小学校訓導はこれを「中心遊戯」と称した上で「中心遊戯」は、どこまでも児童中心で」なければならないと主張しており、ここにも「児童中心」の言葉を見ることが出来る。このような教育観が大正期の「新教育」の下でさらに発展させられてゆくことは先に見た通りだが、「沼倉共和国」のように子どもたちの手により組織される遊びがこのように「新教育」の下で推進されるものだったことを考えると、子どもたちが大人によって考案され与えられたそれまでの遊び[29]から「沼倉共和国」という自ら組織・管理を行なうものへと遊びのスタイルを変化させてゆく過程は、貝島における「旧時代」から「新時代」への変化とも少なからず重なる部分があるだろう。

しかし同時に、この「遊び」が当時の学校教育イデオロギーを否定する機能を持ち合わせていることも確認しておかなければならない。以下の場面に目を向けてみよう。

「どうだね、沼倉。一つ先生も仲間へ入れてくれないかね。お前たちの市場ではどんな物を売つて居るんだい。先生もお札を分けて貰つて一緒に遊ばうぢやないか」

（中略）

沼倉はぎよつとして二三歩後へタヂ〳〵と下つたけれど、直ぐに思ひ返して貝島の前へ進み出た。さうして、いかにも部下の少年に対するやうな、傲然たる餓鬼大将の威厳を保ちつゝ、

「先生、ほんたうですか。それぢや先生にも財産を分けて上げませう。――さあ百万円。」

かう云つて、財布からそれだけの札を出して貝島の手に渡した。

ここで貝島が手渡される「百万円」は先に見た通り「沼倉共和国」大臣の月俸と同額であり、沼倉の「五百万円」、副統領の「二百万円」のどちらにも劣っている。つまり金森裕子の指摘にもある通り[30]、「沼倉共和国」における貝島の地位を決定したのがこの「百万円」分の紙幣に他ならなかったのである。

一九〇〇年代以降、こうした「経済力」「地位」「キャリア」を最も確実な形で保証するものとして信じられつつあったのが学校教育、より分かりやすく言えば「学歴」だった。石岡学は、一九〇〇年代から一九二〇年代にかけての時期が「「学歴」の重要性が社会

的に広く認識されるようになり、多くの男子学生が学歴取得をめぐる競争に参入するようになり、そのことによってますます「学歴」が重要性を帯びてい」った「学歴黎明期」であったこと、さらにそのような時期においては「学歴を獲得することの意味が、社会的上昇という実利的な面だけでなく、象徴的な面（引用者注：「学歴」のステータスシンボルとしての機能面）でもその重要度を増しつつあった」ことを指摘している[31]。このような時期においては、いくら「幼い頃から学問が好きであつた」貝島であっても、石岡の言う「「高学歴＝出世へのパスポート」という認識」を全く持っていなかったとは考えにくい。高等小学校卒業と同時に奉公に出ることを勧めた父に対して貝島が「飽く迄反対して」「お茶の水の尋常師範学校に這入つた」ことの背後に、この「高学歴＝出世」への意識が存在したことは否定できないだろう。

しかしそのように苦労して「学歴」を得た貝島に与えられた「百万円」は、「学歴」と呼べるものを持たない子どもたちと同等またはそれ以下の金額だった。子どもたちのみによって構成される「沼倉共和国」に、「学歴」と地位・経済力を直結させる大人社会、「学歴社会」の論理は働いていないのである。つまり「沼倉共和国」とは、「学歴」そして「学歴社会」という近代的システムを相対化する力を秘めた「遊び」だったのであり、父の反対を押し切ってまで「お茶の水の尋常師範学校」という上位の「学歴」を求めた貝島の努力は、ここに参入した時点で否定されることを免れ得なかったのである。

おわりに

「恐い先生」から「面白いお友達」、すなわち明治期に支配的だったヘルバルト式の教育姿勢から大正期の「新教育」が掲げた「児童本意主義」へ、そして教育そのものを目的とする「教育者」から「生計の資」を目的とする「学校教師」へ。教師貝島から見出されるこの二重の変化と、当時実際に見られた学校教育の変化との間における符合を踏まえるならば、貝島の変化とはつまり当時の学校教育のパラダイムシフトを反映したものとして捉えることが出来る。

しかしこのような貝島の変化と、物語最終部において生じる彼の敗北とが無関係ではなかったことにも注意しておきたい。そもそも「恐い先生」として子どもに接するヘルバルト式の教育者から「児童本位主義」に基づく「面白いお友達」への変化は、それ自体が貝島自身によって行なわれた教師の権威の否定、いわば「教室の主権」[32]の破棄だったと言える。「新教育」において掲げられた「児童本位主義」の本質とは、子どもの個性や自発性を保護すべきものとして尊重することであったが、それは教室内における教師の立場の相対的な下降に他ならなかったのである。

また、最終部分において自分の子に飲ませるミルクを求めて沼倉に取り入ろうとする貝島の姿は「生計の資」への欲求に極めて率直

なものとして描かれている。ここには、金銭を第一の目的として教壇に上がる（「学校教師」化する）教師に対して社会が寛容になりつつあった当時の状況が反映されていると考えるべきだろう。貝島は常に「生計の資」を求める存在である「学校教師」へと化していたがために易々と子どもたちの取引市場に参入することが出来たが、しかしそれは同時に彼が犯した失態でもあったのである。

特にこの「学校教師」への変化に大きく影響した「生計の資」を保証するものとして当時信じられていたのが「学歴」だったが、「沼倉共和国」はこれを無効化する論理の上に成り立つ共同体だったと言える。ここに参入してしまった以上、「学歴」を必死に積み上げて来た貝島と彼の努力は否定される他なかったのである。

以上のように、当時の新しい教育思想を体現した結果貝島にもたらされたのが自身の努力の否定、さらには沼倉との立場の逆転という皮肉だったとするならば、この物語は新時代の学校教育イデオロギーに対する諷刺、さらには批判を含んだものとして捉えることが可能なのではないだろうか。

また、そのような当時の学校教育への批判は、大正末から昭和期における「新教育」の衰退として現実化してゆくものでもあった。特に大正末期以降、貝島の敗北の原因の一つでもあった「児童本位主義」に対しては多くの批判が向けられ始める。増田翼によれば、これは国家権力による学校教育への干渉の増加により自由教育の論者の力が弱まったことに加え、「児童本位主義」が抱える内部的矛盾が明らかになりつつあったことによるものだったという。[33] 特に「児童本位主義」の教育方法に対しては、現場の教師たちからの批判の声が高まってゆく。明治末期から昭和期にかけて愛知第二師範学校附属小学校および東京高等師範学校附属小学校で教員を務めた小林佐源治は、「たゞに子供を随意に放任しておく様では教育にならない」、「教師なくて完全な教育は出来ない」、「少い時間に有効な教育をすることは文化創造の上からも人生の上からも大切である。放任の教育はこの点に欠点を有つてゐる」などと述べ、「児童本位主義」の行き過ぎに疑問を投げかけている。[34] 当時「新教育」が掲げた「児童本位主義」が結果的に教育活動の阻害をもたらすという皮肉な状況は、当時実際に生じていたのである。そしてそのように衰退し始めた「新教育」に代わるものとして昭和期に復活したのが、かつて樋口勘次郎らによって激しく批判されていた知識注入主義的な教育だったのだという。このことについてここであまり詳しく述べることは出来ないが、重要なのは子どもの自主性・自発性を重んじたが故に招かれた「児童本位主義」の挫折が、その実践者であった貝島の敗北という形で大正期のテクストにすでに現れていたことではないだろうか。「小さな王国」発表と同年の大正七年に創刊された『赤い鳥』において掲げられたのも子どもの「ありのまゝ」や「純粋無垢」の尊重などといった自由主義・児童本位主義的な姿勢であったこと

は冒頭でも触れた通りだが、そのような同時代の子ども観・教育観から大きく逸脱するような主題が「小さな王国」に打ち出されていたことはやはり無視できない事実でもある。ただしそこには谷崎の意図というよりもむしろ、テクストそれ自体が持つ先見性があったと考えるべきだろう。

貝島が自身の教育姿勢を「新教育」という新時代の要請に対し身を委ねた結果もたらされた「教室の主権」の喪失。この物語においてシニカルに描き出された凋落する教師の姿は、当時支配的だった「新教育」なるものを相対化し、またそのような教育思想を無批判に受け入れてゆく教師たちを撃つ可能性を孕んでいる。いずれにせよこの物語に秘められた「現代社会の批判」とは単に経済システムにのみ向けられたものではなかったのであり、「小さな王国」というテクストは当時の学校教育への批判を内在させ、さらにはその敗北をも予見していたものとして捉え直されなければならないのである。

＊引用は時代性を考慮し、全て初出に拠った。また引用に際し旧字は新字に改め、ルビは削除した。

注

(1) 原題は「ちひさな王国」(『中外』第二巻第九号、大正七年八月)。
(2) 前田愛「子どもたちの変容　近代文学史のなかで」(『国文学　解釈と教材の研究』第三〇巻第一二号、昭和六〇年一〇月)
(3) 吉野作造「時論—我国現代の社会問題」(『中央公論』三四年一〇号、大正九年一〇月)
(4) 伊藤整「解説」(『谷崎潤一郎全集　第六巻』中央公論社、昭和三三年六月)
(5) 土屋哲「小さな王国」(『谷崎潤一郎研究』八木書店、昭和四七年一一月)
(6) 森岡卓司「谷崎潤一郎「小さな王国」の論理」(『文芸研究』第一五一号、平成一三年三月)
(7) 中谷元宜「「小さな王国」論—ある歴史家の挫折—」(『阪神近代文学研究』第五号、平成一六年三月)
(8) ここに位置づけられる作品は他に、「少年」(『スバル』三年六号、明治四四年六月)、「神童」(『中央公論』三一年一号、大正五年一月)、「母を恋ふる記」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』大正八年一月～二月)、「或る少年の怯れ」(『中央公論』三三年九号、大正八年九月)など。宮城達郎「谷崎潤一郎『小さな王国』」(『国文学　解釈と鑑賞』第三四巻四号、昭和四四年四月)が、早くから「小さな王国」をこの系譜の中で捉えている。
(9) 牟田和恵『戦略としての家族』(新曜社、平成八年七月)、小山静子『子どもたちの近代—学校教育と家庭教育』(吉川弘文館、平成一四年七月)を参照した。
(10) 田中俊男「「善人の側」と「悪人の側」—谷崎潤一郎「小さな王国」の時代—」(『島大国文』第三一号、平成一七年三月)
(11) 関礼子「教室空間の政治学—『一房の葡萄』・『小さな王国』を中心に—」(『日本文学』第四六巻第一号、平成九年一月)
(12) 尺秀三郎『講習必携実用教育学』(長崎県有志教育会、明治二八年一二月)

(13) 谷崎潤一郎「幼少時代」(『文芸春秋』第三三巻一〇号〜第三四巻三号、昭和三〇年四月〜三一年三月)

(14) 大久保典夫は「文学のなかの教育(Ⅲ)—谷崎潤一郎「小さな王国」—」(『文学と教育』第四号、昭和五七年一二月)において、貝島には野川だけでなく、谷崎が「此の人以上に私に強い影響を与へた先生はない」(「幼少時代」)とする稲葉清吉の姿が投影されているとしている。

(15) 前田愛(前掲)。

(16) 堀尾輝久『天皇制国家と教育—近代日本教育思想史研究—』(青木書店、昭和六二年六月)

(17) 樋口勘次郎『統合主義新教授法』(同文館、明治三二年四月)

(18) 中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房、昭和四三年一二月)

(19) 赤津隆助「殺人的教授法」(『教育実験界』第一七巻第一号、明治三九年一月)

(20) 稲毛詛風「教育上の民本主義を論ず」(『雄弁』第九巻一号、大正七年一月)

(21) 田中俊男(前掲)。

(22) 日高佳紀「〈改造〉時代の学級王国—谷崎潤一郎『小さな王国』論—」(『日本近代文学』第五九号、平成一〇年一〇月)

(23) 三浦修吾『学校教師論』(内外教育評論社、大正六年一月)

(24) 寺崎昌男編『近代日本教育論集〈6〉教師像の展開』(国土社、昭和四八年二月)。なお、中森による引用は三浦の原文の記述と一部相違があるが、これについては特に訂正を行なっていない。

(25) 前掲大久保典夫、日高佳紀、田中俊男など。

(26) これは後に『教師及校長論』(同文館、明治四一年一一月)において提唱された、教師は「職務のために一生を捧ぐる覚悟をなす」べき「聖職」であるとする聖職教師論へと発展する。

(27) この他にも第一次大戦期には、J・P・ガーバー、大日本文明協会事務所訳『現代の教育的運動』(大日本文明協会事務所、大正三年一一月)が教員の俸給問題について詳細に触れている。また山松鶴吉『小学教育最新の傾向』(教育新潮研究会、大正三年七月)は、当時都市部において一般化しつつあった教師の副業を公認し、教師の生活を保障すべきであると述べた。

(28) 中野光(前掲)。

(29) 「沼倉共和国」発足以前に子どもたちが興じている遊びが「戦争ごっこ」だが、これと同種の遊びは明治中期にはすでに(大人によって)開発されている。例えば『少年世界』第一巻第一号・第二号(明治二八年一月一日・一五日)「遊戯」欄に掲載された、鳥越山彦考案の「戦争遊戯」など。

(30) 金森裕子「谷崎潤一郎『小さな王国』論—子供観の解体—」(『国学院大学大学院文学研究科論叢』第三〇号、平成一五年三月)では、貝島が子どもたちの遊びの世界に参入したことによって子どもから「さもしい人間と捉えられ」、「〈子供〉の側から採点され」ることになったという指摘がなされている。

(31) 石岡学「生きられた「学歴エリート」の世界—学歴社会黎明期における高学歴男性の教育経験—」(小山静子・太田素子編『「育つ・学ぶ」の社会史—「自叙伝」から』藤原書店、平成二〇年九月)

(32) 沢柳政太郎が『教師及校長論』(同文館、明治四一年一一月)においてこの言葉を使っている。沢柳によれば教育者はあくまで「教室の主権者」として子どもに向かうべき存在でなければならないという。

(33) 増田翼「丹澤美助の〈新注入主義教育〉に関する一考察」(『仁愛女子短期大学研究紀要』第四五号、平成二五年三月)

(34) 小林佐源治「自学自習問題と誤見」(『教育研究』第三〇九号、大正一五年一二月)

—でき・りょうすけ、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学—